

句集『窓の三重奏』を読む

「蒼穹」主宰 加藤哲也

マキ・スターフィールドさんから、また、素敵な句集を送って頂いた。

表紙の、コーヒーカップと窓の組合せは、マキさんの言われるように、なんとも美しく、この句集のタイトルに相応しい。

アジェイ・アギーバーとマキ・スターフィールドと吉村侑久代の3名による合同句集だが、まず最初に英語俳句が前段にあり、後段に、それに対応した日本語の俳句が、それぞれ、1ページに1句ずつという贅沢な構成となっている。

ところどころに挿入されている写真も、俳句のイメージと不思議に重層しており、感性に訴えかける。

私は、英語俳句は得意ではないので、日本語の俳句について、2,3 コメントさせて頂きたいと思う。

・アジェイ・アギーバー

何と優雅に
すばやく影を拾っては落すのか

この句集の、表紙とも繋がっているのか。コーヒーカップの影？
実際には、人間のことを意味しているのだろう。影とは実体である。

何度も失敗しては繰り返す人生を暗示しているように思われる。
だが、それこそが人生であり、優雅なのだ。

嵐の窓の
後ろに未だ嵐ある
ティーカップの中

この句集のまさに表紙絵のイメージの句。
嵐の窓、そして、ティーカップの中にもある嵐。

人間の外界、そして、内面の苦悩を暗示しているのだろう。
だが、これもまた、何とも美しい3段構成だ。

霧深し
列車堀たる
己がトンネル

霧の中とは、まさに生きいく道そのものだ。
そこを、列車は、自分自身でトンネルを切り開いていく。

これもまた、人生そのもの。すべては深い霧の中にある。

・マキ・スターフィールド

一滴の
光となりぬ
渡り鳥

渡り鳥が、遠くの空へ渡っていく。
それは、最後は、「一滴の光」となるという。

それは、希望の光であるに違いないだろう。
命の光であるに、間違いない。

礼拝の
窓より愛と
思しきもの

礼拝の窓から、何が見えるのだろうか。
外の景色には違いないが、そこから見えるものとは。

すべての外界こそが、生命の源とも言えるのだろう。
そこには、すべて、愛が溢れているはずだ。

桜咲く
記憶をなくす
裸女がおり

桜の下では、すべての人がそこで死にたいと思う。
そして、それは、やはり裸ではないか。

記憶もすべて失くしてしまいたいと思わないか。
すべてを忘れて、桜の下で死にたい。

・吉村侑久代

梅香る地下室のある古本屋

実際にありそうな景であるのが面白い。
「地下室のある古本屋」

だが、本当に地下室はあるのだろうか。
その梅の香は、地下室にまで静かに漂ってくる。

蔓バラの時計回りに家包む

この句などは、見事な写生句とも言えるだろう。
確かに、時計回りなのだろう。

だが、もし反時計回りであったら、どうなるのか。
そんなことを想像しても、面白い。

初雪や石庭かすかに動きおり

雪の積もった石。どこか少し動いた気がする。
かすかなのか、大胆なのか。

石にも命はあるのだろう。
そして、初雪は、静かに語りかけるのだ。